

感情の制度化

——メルロ＝ポンティの一九五四—一九五五年講義より——

加 國 尚 志

はじめに^①

「感情」(le sentiment) は、哲学—とりわけフランス哲学—の伝統においては、主観の内奥の、世界から隔絶された起源に置かれており、言わば最も私的な体験としてとらえられている。他方、カントの共通感覚論が示す通り、感情(美における快・不快の感情)は、普遍化しえないにもかかわらず、普遍的な伝達可能性(allegemeine Mittelbarkeit)を有する感覚として、公共性の起源として考えられてもいる。感情が、純粹な体験の私的・秘匿的性格と、言語によって媒介されて伝達・分有・共感される性格とを併せ持つということが、「私的(private) — 公共的(public)」というカテゴリーによる素朴な二者択一を逃れる領域をわれわれに提示していることはたしかであると思われる。

また社会学の古典に目を転じてみると、ヴェーバーの『社会学の根本概念』^④では、非合理的な(irrational)感情(Affekte)に影響された行為は、理念型を通じて構成される純粋な目的合理的行為の理解からの「偏向」(Abweichung)「逸脱」(Ablenkung)として理解されている。感情を非合理的なものと考えるかぎりでは、その理解可能性は感情移入(einfühlen)を通じての追体験(nacherleben)による意味連関の理解の枠内にあり、感情に基づく行為は、「科学的に」(wissenschaftlich)「構成するべき」(zu konstruieren)「理念型的構成」(idealtypische

Konstruktion)が行われた後で初めて理解されるべきものである。^⑤もちろんヴェーバーはすぐに但し書きをつけて、「場違いな合理主義的解釈の危険」(die Gefahr rationalistischer Deutungen am unrechten Ort)を指摘している。非合理的・感情的行為と目的合理的行為との区別はあくまで理論上のものであり、現実の行為において両者は「混合されて」(gemischt)いる。^⑥

メルロ＝ポンティは、「感情」を主題的に扱った哲学者ではないが、すでに『知覚の現象学』で「親子関係のように身体に刻み込まれているように見える感情も実は制度(institutions)である」と述べていた。^⑦一見最も個人的で自然的に見える「感情」も、実際にはどこかで公共的・文化的なものと関わっており、他方で一見最も公共的に見える社会制度も、どこかで個人的なものや自然的なものに触れている。「感情」の問題を、主観—客観、非合理的(偶然的) — 合理的(必然的)、能動的—受動的の二者択一を離れた観点から理解するために「制度化」(institution)の概念^⑧が提案されるわけであるが、二〇〇三年に公刊されたメルロ＝ポンティのコレージュ・ド・フランス講義『制度化・受動性、コレージュ・ド・フランス講義ノート(一九五四—一九五五)』において、「諸感情の制度化」と題して、ブルースト『失われた時を求めて』の愛の分析が行なわれている。そこでは、愛の感情をブルーストに即して見ることで、感情を「制度化」としてとらえようとするメルロ＝ポンティの試みを見

ることができる。⁹⁾

本論文では、感情を「制度化」としてとらえることによって、感情の問題が単に主観的—心理的な問題を離れて、個人的なものや公共的なもの、主観的なものと客観的なものとの境界が侵蝕されるような、社会的行為の意味発生の母胎となる次元を開示するものであることを示してみたい。本論文ではまず(1)「制度化」についてのメルロ＝ポンティの議論に触れ、つづいて(2)プルーストの愛の分析を取り上げる。最後にこれらの議論を踏まえた上で、(3)一九五二年以降のメルロ＝ポンティのマックス・ヴェーバー解釈に「制度化」の概念が反響していることを指摘し、「感情」の了解が「合理的行為」の了解からの偏向ではなく、合理化の生成過程とも呼び得るような「制度化」のプロセスを開示するものであることを示してみたい。

1 構成 (Konstitution) から制度化 (institution) へ

カント以降、主観の側から対象に概念を適用することによって経験の対象を構成するという考え方に見られるように、構成という観念は主観—客観の強い対立関係を前提とした、主観による対象の能動的構成を想定している。フッサールも、『イデーニ』が「構成のための現象学的研究」という副題を持っていたように、領域的存在論の着想において、「構成」の観念を用いて「人格主義的世界」を考察しようとしていた。しかし、メルロ＝ポンティも指摘するように、「フッサールのためらい」(IP34) と呼ぶべきものがあり、それは対象を「…として統握すること」(Auffassung als) という能動的構成に対して、「制度化(創設) (Stiftung) としての受動的構成が現象学の構成理論の内部で問題化してきたことを示している。制度化の観念をカント的な意識主観による対象構成の観念

から区別するのは、受動的総合と相互主観的な発生論の視点である、と言えよう。すでに『イデーニ』第二巻においても「動機づけ」(Motivation) あるいは「連合」(Assoziation) の概念を軸に、「構成」は「発生」の観点に置き換えられつつあったのである。社会的現実を、構成された対象としてではなく、相互行為の受動的で潜在的な発生土壌から理解することが必要であるなら、まず「構成」というカント的—新カント派的先入見を捨てることから始めなければならない。¹⁰⁾メルロ＝ポンティは「制度化された主観」(sujet institué) と「制度化する主観」(sujet instituant) とを主張し、それを「構成する主観」(sujet constituant) ではない、とする (IP35)。カントの超越論的主観のように制度を上空飛翔する理論的観察者ではなく、社会的現実の中で行為する主観とは制度化の主観なのである。同様に、他者も「構成し」たり「構成され」たりする主観ではなく、「制度化され—制度化する」主観として理解されねばならず、主観—客観の二者択一に代えて「相互主観的あるいは象徴的領野」(champ intersubjectif ou symbolique) 「場」(milieu) 「蝶番」(charnières) 「連結」(jointure) としての制度化の領野を理解せねばならない、とメルロ＝ポンティは主張する (IP35)。

ここでは、行為も「目的—選択」という構造によってではなく「スタイル」(style) (IP35) による操作と理解されるべきであり、時間はその「能動性—受動性」の構造からして「制度化のモデル」と呼ばれ、言わば「発生状態の制度化」であることになる。このような意味での制度化は「感情」だけではなく、「知」「作品」「文化」「歴史」にも見られるものであって、生命、有機体、動物性といった自然の領域にも、たとえば「刷り込み」のような「制度化」が見られるのである。

このようにメルロ＝ポンティは、制度化をさまざまな経験が意味を持つこととなるような「次元」(dimension) ととらえていくことになる

(IP68)。制度化には個人的制度化と間個人的制度化があるわけだが、個人的制度化において、「偶然を通じての個人的歴史の基づけ」(IP73)が考えられねばならない。たとえば感情の制度化において、愛の誕生、愛の「結晶化」(crystallisation)は「構成する―構成される」もの間を行く道を見出すことによってしか理解されないとメルロ＝ポンティは述べている。

要約するなら、(1)主観と客観、自己と他者の二者択一に代えて「場」「蝶番」「連結」「領野」「次元」の概念を導入し、対象の構成ではなく発生の場、相互主観的領野を問題化しなくてはならない。(2)制度化を發生の視点からとらえるために時間性の概念(たとえば原創設Urstiftung、最終創設Endstiftungの受動的総合の構造)を導入しなくてはならない。(3)個人と公共、特殊と普遍、偶然と必然の間に循環的な構造を見出さなくてはならない。「感情」は、個人的制度化として、「構成」によっては理解されないような制度化のモデルであることになる^⑩。

2 制度化としての愛

この講義でメルロ＝ポンティは、感情の制度化の具体例としてブルー・スト『失われた時を求めて』の愛と嫉妬の描写を分析してゆく。ブルー・スト『失われた時を求めて』には、スワンとオデット(『スワンの恋』)、語り手とアルベルチヌ(『囚われの女』『逃れざる女』)の愛と嫉妬が描かれているが、メルロ＝ポンティがもっぱら重視しているのは後者の感情の動きである。結論を先取りするようには、それは愛という感情が、愛される他者との関係、心情の変化の時間的構造によって、単に主観的でも偶然的でもなく、否定を介しながら、私と他者、偶然と必然を循環関係へともたらしすことを描いているのである。したがって、ここで制度

化として問題になるのは、感情における他者との関係と時間性の構造であって、自分勝手に、気まぐれに始まった愛が、私(語り手)と他者(アルベルチヌ)の関係を生成させていくプロセスが問題なのである。

周知の通り、『失われた時を求めて』で、語り手はアルベルチヌという女性(『花咲く乙女』の一人)に恋をするが、奔放な彼女への嫉妬にかられて苦しむ語り手は、アルベルチヌが同性愛者ではないかと勘ぐって、彼女を嘘つきであると考え、二人の愛が非―実在的で実現不可能であると考えるようになる。

語り手は最初アルベルチヌ当人を愛しているというよりも、アルベルチヌの中に少年時代の避暑地の思い出を見て愛しているにすぎない。したがって、語り手の愛は、きわめて自己愛的なものとして始まっている。次に、奔放なアルベルチヌに嫉妬をするようになってからは、彼はアルベルチヌの愛を疑い出す。しかしそれは、彼がアルベルチヌに愛されていないと思いついてからであり、それは結局彼がアルベルチヌを本当には愛していない(自己愛的にしか愛していない)からである。このような愛には「ナルシスティックな色調」(IP68)がある、とメルロ＝ポンティは述べている。この嫉妬の苦痛から、愛そのものがそもそも幻想であり、不可能なのではないか、という考えが語り手の中に生まれてくることになる。

このような語り手の嫉妬は実はきわめて自己愛的で、自分だけを愛することではかないのだが、メルロ＝ポンティはそこに一つの「愛し方」(façon d'aimer)を見る。最初、語り手はアルベルチヌを愛してはいなかったことを告白しているのだが、彼は本当には愛していないのに、嫉妬によって自分を苦しめ、そのことによってアルベルチヌへの欲望をかきたてるのである。

愛とは愛されたいと望むことであると考えるのは、他者を非我と考え

るような分析的―構成的意識にとつてのことでは、とメルロ＝ポンティは述べている。メルロ＝ポンティが愛と嫉妬の交錯の中に見出すとする制度化としての愛は、「私―他者の蝶番」(IP65)をわれわれに示すのである。愛とは、伝統的に(1)「自由についての密かな意識」、(2)「他者によって脅かされる意識」、(3)「他者に自分を認めさせようとする意志」、(4)「この地盤の上に“構成された”共通の“生活”と考えられるもの」、(b)この構成への自己満足、(c)偶然の諸要素を持つものである、という愛の感情への批判的意見も生じてくることになる(IP64)。プルーストは、こうした意見の基礎に「接近することのできない」(inaccessible)他者「不可能な(impossible)他者としての他者」(IP64)の幻想を見出している。メルロ＝ポンティによると、プルーストは「満足した愛が死んでしまい、喪失や嫉妬によつてしか再生しない、不可能なものとしての愛」(IP64)について語っているのである。

だとすると、愛という感情が主観的であると一般に批判されるのは、その根底に他者を所有することの自己満足か挫折かに終わる、「愛の可能性」という事実があるからである。メルロ＝ポンティは、この可能性を検証しながら、愛は不可能であることによつてしか可能でない、不可能であることによつてしか現実的ではないという逆説の意味を探つて行くのである。

まず、愛における「矛盾としての欲望の実在性」(IP66)が考察される。愛において、相手を所有したいという欲望は矛盾しているのであつて、なぜなら相手を本当に所有してしまえば、それは私にとつて奇跡のようにすばらしい他者ではなくなつてしまうという逆説があるからである。愛する相手が私の欲望をかきたてるのは、相手が私に不安や不在、喪失感を与えるからであるのだとするなら、相手を所有することによつ

て満足が得られると考えるのは幻想であることになる。他者を所有することへの欲望(オデットに対するスワンの欲望)はこの意味で矛盾しているが、しかしこの欲望が実在し、リアルなものであることは否定できない。言いかえるなら、愛とはこのような矛盾した欲望のリアリティの中に存在するのである。

このような意味で「愛の現実性」が語られ始めるのだが、それは大変奇妙なものであつて、愛は、とりわけ嫉妬において疎外をもたらすことによつてリアルである、ということである。どれほど矛盾しているように見えても、この疎外は現実的なものであつて、愛は愛に陥っている人を自己自身から引き離し、他人にしてしまう。愛という感情がどれほど自我の内奥感として感じられるものだとしても、あるいはまさにそのゆえに愛に陥っている人は、自分自身を失つてしまつている。そこでは嫉妬する者は我を忘れており、嫉妬する者とされる者の「どちらが不在であるのかわからない」(IP66)という状態が生じる。

そこから語り手の愛は、自分から不幸を求めよう愛へと変質して行き、語り手の嫉妬深い愛は「苦痛と不在の探求」という色調を帯びて行くことになる。嫉妬深い人は、自分で不安の材料をあれこれと探し出し、自分を苦しめることに熱中して、そのことに快楽を見出す人のことである^⑬。嫉妬深い人とは、恋人の悪徳や裏切りを想像することによつて愛をよみがえらせようと努力する人であつて、それは「苦痛と退屈の間の愛」(IP69)として、言わば「幻想としての愛」であることになる。

こうして、『失われた時を求めて』の語り手が語つた愛は「否定」(negation)としてのみ現実的であるかのように見える。嫉妬する者と嫉妬される者の間には鏡のような関係が生じている。「愛されていない」と思つて嫉妬するのは相手を本当には「愛していない」、つまり自分のイメージ通りの所有物としてしか愛さないという自己愛的なしかたでし

か愛していないからである。そこでは自分が愛されていないと思えるような材料を思い浮かべれば思い浮かべられるほど、相手への不快と欲求が強まってくるような形で愛がよみがえってくるかのような錯覚がある。このような嫉妬に達すると、他者は喪失として、苦痛として私の中に存在し、その欠如によって「実現不可能なもの」として存在する。このかぎり、「他者は私の生活の全地平を占有する者」(P70)となる。

メルロ＝ポンティはそれを毒と薬の同一性に喩えている(P70)。愛が毒のように語り手を苦しめるのは、それが不在であり他性だからである。愛が薬であるのは、まさに不在として現前することによって、不在や欠如を中斷するからである。したがって、この段階では愛に完全な不在も完全な現前もないのであって、「実現不可能なもの」(irrealisable)「不可能なもの」として、「否定的実在性」(réalité négative)を持つだけであるかのように見える。

しかし、『失われた時を求めて』では、このような否定的実在が否定される瞬間がやってくる。アルベルチヌは語り手との同棲生活を突然打ち切り出発してしまう。同棲中にはあれほどまでに語り手を嫉妬させ、眠っているときにしか愛を確かめることができず、語り手の中の愛を疑わせさせたアルベルチヌがいざ語り手の許から去ってしまうと、アルベルチヌへの愛が語り手の中で結晶化する(揮発状態から結晶化へ)。「愛は出発点においてどれほど自己中心であっても、独話とは別のものになる。」(P71)

アルベルチヌが語り手の思い通りにならないしかたで語り手と同居しているとき、語り手には愛は苦しい嫉妬であり、愛は不在としてしか可能ではない(愛の不可能)。しかし、『囚われの女』の最後でアルベルチヌが語り手の許を去ったとき、語り手は愛の「結晶化」を感じることに^④なる。自己中心的で想像的なものとして始まった愛が、ほとんど不

可能なものとしてしか実在せず、もう会うまい、別れよう、終わりにしようと思っていた時、当の相手が本当に不在になってしまうことで、消え失せかけていた愛情が結晶化する。自己中心的な愛、嫉妬深い愛を経て、愛を断ち切るうとしたその時に、アルベルチヌの出發という偶然的出来事によって愛が結晶化するのである。

そして最終的に『逃れざる女』でのアルベルチヌの突然の事故死によって、この否定的否定は決定的となる。こうして『失われた時を求めて』では、まるで語り手とアルベルチヌの関係は、最初からこの別離(死別)を一つの終点として先取りしていたかのように進行していたことになるのだが、しかしそれは、その進行中には語り手には理解されない^⑤。まるで、愛は別離においてしか成就しないように進んでいき、まるで二人はずっとお互いに冷淡を装いながらこの別離を先取りして演じていたように見えてくるのである^⑥。

こうして不可能なものとしての愛において、他者は私の不安、喪失、他者の不在の中に現前することをメルロ＝ポンティは述べている。語り手にとってアルベルチヌの思い出と彼女への愛は「死という最大の不在」によってしか引き継がれ得ないのであって、「ひとは不在しか愛さない」(P75)。しかし、まさにこのような他者の経験こそが、自己の感情の産物であることをメルロ＝ポンティは指摘している。メルロ＝ポンティは、他者を自己に似せ、自己を他者に似せてしまう「鏡」にこのことを喩えている。ブルーストが述べているように「そもそもわれわれの愛する人たちとは、われわれが自分の愛情をそとに出そうとする漠然としたひろい一つの場所ではない^⑦」のであって、愛とはこのような「鏡の創設」なのである。(私を愛してくれないと思う相手が映し出しているのは、自己愛的にしか他人を愛そうとしない語り手の姿なのである。)愛が否定的な現実性しか持たず、疎外に終わるからといって、それは「誤り」や

「失敗」ではなく、鏡の場合と同じくここでは、「自己の不在」が「他者の現前」であるような否定を介しての共存が成り立っている。愛は「自己の彼方」「誤った所有の欲望の彼方」(PP4)にわれわれを導くのであり、語り手にとつてのアルベルチーヌは、「触れることのできないもの」(intangible)であつて、まさにその「触れることのできない」ことが、偶然に始まった自己愛的・自己満足的な愛を死と別離の先取りとしての愛であつたかのように完結させ、語り手の中に「偶然であるが執拗なまちがいのために起きた一種の定着化」によつて、いつのまにかわれわれ自身の肉体の中に住み着いてしまった人間の魅力^⑧を残したのである。愛は失つてしまふまでそれがそこにあつたことはわからないものであつて、失つてしまつて初めて永遠にそこにあつたものとして創設され、以後それは最初から失われることによつて完成するものであつたかのように記憶の中で生き始めるのである。

ここでメルロ・ポンティの議論をわれわれなりに要約しておくならば、ブルーストにおける「感情の制度化(この場合は愛の制度化)」が示しているのは次の二点であるように思われる。

(1)「感情」の私的で内面的な特徴が、「他者の不在」によつて引き起こされる欲望の矛盾によつて否定され、疎外されることによつて、主体を所有の独話的自己満足の彼方に導き、他者の不在によつて現実的となるような、他者との「鏡」の関係(蝶番の関係)が創設されるといふこと(言いかえるなら、他者の他性が不可能性として、不在として現前することによつて自我と他者との間に相互行為の可能性—しかし何という可能性であるうか—の場が開けるといふこと)。

(2)初めは偶然的で自己愛的・自己満足的だった愛情が、他者との関係の時間的生成変化の中で、自己愛や自己満足を打ち碎き、後から振り返れば、一つ一つの偶然的と思われた出来事や気まぐれな行為が別離とい

う完結点において永遠のものとなる愛を準備していたかのように、それらの出来事や行為に必然性が透かし見えてくるような、「結晶化」、偶然の再結合があるということ(言いかえるなら、外から意味付与によつて構成された必然性でも、構成の及ばぬまったくの偶然性でもなく、さまざまな偶然が必然性を胚胎し、必然性が偶然によつて侵蝕されていく「合理化—非合理化」の循環過程があるということ)。

以上のように見てくると、「感情」が「構成」されるものではなく「制度化」されるものであるということの意味も自ずと明らかとなつてくるのではないだろうか。愛や友情は最初から愛や友情として「構成」されたりしないし、他者は最初から「恋人」「友人」として自己所有的に構成されたりはしない。それは個人の歴史の中で、感情が他者へと開かれていく過程の中で、結晶化作用のようにして設立されるのである。その意味で、ヴェーバーが感情に基づく行為を「非合理的」と呼んだのは正しかったのだが、問題は感情の非合理性は合理的な目的追求的行為を原型とした上での「偏向」でしかないのかどうか、「偏向」とはそもそも二者択一的な境界を認めない概念ではないのか、ということである^⑨。この講義でメルロ・ポンティが(レヴィ・ストロースを批判しながら)ヴェーバーの中に認めているのは、一見非合理的な諸選択の親和性の中に合理性の発生を見出すような「制度化」の概念である。

「マックス・ヴェーバー…実際、偶然な再結合が必要であるが、これらの諸条件(多様性と蓄積)のもとで、それ自身の論理を持ったシステムが発生してくるのである」(PP44)

「強い意味での制度化、それは一つの領野の開け(ouverture)、諸次元に即した一つの到来を存在させるようにするこの象徴的母胎(matrice symbolique)なのであり、そこから或る共通の冒険の可能性と意識としての歴史の可能性が始まるのである。」(PP45)

メルロ＝ポンティの「制度化」概念がヴェーバーの「選択親和性」(Wahlverwandtschaft)と関わるのは、まさにこのような「諸々の偶然の再結合」としての「制度化」という意味においてである。

3 制度化とヴェーバーの「現象学」

メルロ＝ポンティが『弁証法の冒険』(一九五五年)でヴェーバーを取り上げたことはよく知られているが、彼が講義でヴェーバーを取り上げたのは一九五三―一九五四年講義(「制度化」講義の前年)においてである。そこではヴェーバーは歴史的事実の「根源的偶然性」(RC47)に注意深い思想家として描かれている。その本領は、ヴェーバーのカント学派的な著作^②においてではなく『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において発揮されるのであって、彼はそこで「悟性による構成を、歴史の〈了解〉へと」(RC48)乗り越えていくのである。カルヴァン主義の倫理と資本主義を可能にするような選択との「親和性」が唱えられるとき、問題となっているのは「これらの選択が最終的に(finalemment)すべてが一緒になって(tous ensemble)西洋の資本主義を生み出すことができた」(RC50)ということである。メルロ＝ポンティはヴェーバーの中に「歴史的選択の現象学の素描」(RC51)を見るのであって、それは「細部にわたる無数の諸事実」がその周囲に「配置される」(s'installe)「了解可能な諸々の核」(RC51)を見出すものである。この選択親和性は、偶然の中に必然を発見すると同時に、その完結を認めず、偶然の余地を認めるようなしかたで歴史を理解することを可能にする。

「諸々の投企は進行中に変形されていくのだが、収支決算を行なう世代はその経験を制度化した(institue)世代ではないのだから、事実の教

えが受け継がれることもない、ということになる。ヴェーバーの現象学は、ヘーゲルの現象学のように体系的ではないし、絶対知へ行き着くともない。」(AD35)

このような意味で、メルロ＝ポンティの解釈によると、ヴェーバーの「合理化」「脱魔術化」としての歴史の過程においては、「偶然とのわれわれの絆」(AD36)は失われることはなく、そこには「保証はない」(AD36)。それは偶然との接触を失うことのない「象徴的母胎」(matrice symbolique) (AD25)なのであって、先述したとおり、この「象徴的母胎」とは「制度化」の概念そのものである。

このように見てくると、「制度化」(institution)の概念が、単に感情の変様の構造を述べた主観的―心理的なものではなく、言わば「ヴェーバーの現象学」を取り出すための鍵でもあることが理解されよう。感情がそれだけでは個人的歴史の制度化に関わるもので、公共的歴史に関わるものではないとしても、それに基づく行為の理解を目的合理的行為の理解からの「偏向」と考える必要はない。^③嫉妬深い男の行為は「前歴史的制度化」(IP38)であり、資本主義発生期の禁欲的な資本家の行為の歴史的制度化とは区別されなくてはならないとしても、それは「制度化」＝象徴的母胎の特殊化と普遍化の「二側面」(IP44)なのであるまいか。「感情」の制度化の議論がこうした射程を含んでいたことを示す次の言葉を引用しておこう。

「公共的歴史の合理性の意味を定めることができるのは、個人と公共的歴史、または無記名の制度との関係を研究することによってである。(中略)私的なものと公共的なものは出来事へのアンガジュマンによって結びつけられるのではなく、反響、交換、象徴的蓄積によって結びつけられるのである。そこでは道徳とイデオロギーは反応しあい、その逆に労働形態は精神を支えている、というのは本当のことである」(IP47)。^④

「構成」から「制度化」へという視線の変更は、感情的行為と目的合理的行為の間に共通の発生構造を発見することを可能にするのであって、それは個人史における感情の移り変わりを記述する文学（物語）と「客観的」な社会「科学」とを対立させるよりも、むしろ個人史と公共の歴史とが絡み合って発生してくる象徴的母胎の二側面的な解明として理解するべきであることを示しているように思われる。個人的なものや公共的なものがなぜ共通の構造のもとに語られうるのかという原理をメルロ＝ポンティはこの講義では十分に提示し得ていないように見えるし、おそらくそれは彼の後期存在論の中で再び取り上げられるのだろうが、紙幅も限られた本論文では、軽々しい批判は控え、メルロ＝ポンティの新しく出版された資料からの「感情」についての一つの解釈と問題点を示すことで満足したい。

注

- ① 本論文は二〇〇三年二月七日、京都女子大で行われた日本現象学・社会科学会第20回大会シンポジウム「感情」での提言として口頭で発表されたものである。
- ② 一九一〇年四月一二日付けのベルクソンの次の書簡を参照。
「さて、フランスには直接的な感情 (sentiment immédiat)」、直観、内的生活への呼びかけによって表現されるような、もう一つの偉大な思想の流れがいつも存在しました。それは17世紀にはパスカルによって、18世紀にはルソーによって、19世紀には、外国ではあまり知られておりませんが、深遠な思想家メーヌ・ド・ビラン（一八二四年死去）によって代表されます。」(Henri Bergson, *Correspondances*, PUF, 2002, p. 249.)
- ③ ハンナ・アーレント『カント政治哲学の講義』浜田義文監訳 法政大学出版局 一九八七年
- ④ Max Weber, *Soziologische Grundbegriffe*, in *Methodologische Schriften*, S. Fischer, 1968, p. 283.
- ⑤ *Ibid.*, p. 285.

- ⑥ *Ibid.*, p. 305.
- ⑦ Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945, p. 220.
- ⑧ メルロ＝ポンティの「制度化」に言及した邦語文献として以下のものを参照。
木田元『現象学の思想』ちくま学芸文庫二〇〇〇年、121頁以下
鷺田清一『メルロ＝ポンティ「可逆性」』講談社一九九七年、216頁以下
西原和久「法と政治の現象学的社会学—シュッツ理論の系譜から」『現象学年報17』日本現象学会編 二〇〇一年、87頁—101頁
廣瀬浩司「自然と制度」『メルロ＝ポンティ研究』第四号 メルロ＝ポンティ・サークル一九九八年、35頁—48頁
また、同じく廣瀬浩司による次のフランス語文献は、「感情の制度化」の問題も含めて未刊草稿の段階でのテクストを研究したものととして、メルロ＝ポンティの「制度化」概念についての最良の研究である。
Koji Hirose, *Problématique de l'institution dans la dernière philosophie de Maurice Merleau-ponty, Événement Structure Chair*, Université de Tsukuba, 2004.
- ⑨ institutionを「制度化」と訳すことについては、木田元氏は次のように述べている。
「institutionというこの概念が、通常『構成』と訳されているフッサールのKonstitution (constitution) にいわば語呂を合わせて構想されたものであることは明らかである。例の講義においても『もし主体が制度的であって構成的ではないとしたら (Si le sujet était institution, non constituant)』といった言い方がされている。それにしても、institerという動詞にしても、それが名詞化されたinstitutionにしても『設定する・設立する』『設定・設立』というのが基本的な意味であるから『制度化する』とか『制度化』といったこのなれの悪い訳語を当てる必要はなさそうに思われるのだが、彼がこの概念を『公共の歴史』におけるもろもろの制度につなげて考えようとしていることは明らかなので、あえてこの訳語をとりた。」(木田元前掲書 122頁)
- ⑩ フッサールは「構成的発生 (konstitutive Genesis) の視点」から、前社

会的主観性と社会的主観性の「理念上の区別」を論じている。Edmund Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologische Philosophie*, zweites Buch, Martinus Nijhoff, 1952, p.198.

⑪ フッサールは『相互主観性の現象学』第二巻で愛を通じての共同体の設立について触れている。

「理念的には、愛の共同体 (Liebesgemeinschaft) には、人格的な主観として、すなわち社会的にコミュニケートする主観として互いに愛し合う者達が一方だけの欲求の方向 (Strebenrichtung) においてのみ欲求の共同体を設立した (gestift haben) のではなく、このような共同体は本来的になしかたで、また非本来的になしかたで、両者のあらゆる可能的な欲求に対して設立されているということが属している。」(Edmund Husserl, *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität, zweiter Teil, 1921-1928*, Husserliana Band X IV, Martinus Nijhoff, 1973, pp.172-173.

「愛する者達は横並びに (nebeneinander) また連れ立って (miteinander) 生きるのではなく、顕在的にも潜在的にも、互いに入り交じりて (ineinander) 生きていくのである。」(Ibid., p.174.)

⑫ おそらくメルロ＝ポンティはサルトル『存在と無』を念頭に置いている。その第三部「対他存在」第三章「他者との具体的な諸関係」I「他者に対する第一の態度」でサルトルは、ブルーストを例に引き、他人の自由を己のものにしようとする投企を「誘惑」として説明している。

Jean-Paul Sartre, *L'Être et le Néant*, Gallimard, 1943, p.434.

⑬ メルロ＝ポンティは『幼児の対人関係』の中で嫉妬について次のように語っている。

「嫉妬深い人」はいろいろな調査をし、いろいろな情報を求め、そしていつも自分の苦悩や不安をかき立てるための仮説をつくりあげます。ワロンはねたみのなかに、結局は性感の強化を目的とするような一種のへつらいがあるということさえ、指摘しております。彼の教えるところでは、さまざまの三角関係の心理学的説明も、ここにあります。三角関係とは、嫉妬の経験を永久的なものに組み立てるという意味をもつものにはかならず、そして当事者達はその嫉妬を、不安の増大として、またそれがますます(他人の領分への侵入)や(性欲)といった反応を強化

するからという理由で求めるのです。」(『幼児の対人関係』木田元・滝浦静雄訳みず書房 二〇〇一年、91-92頁)

⑭ 「そうだ、さっきフランソワーズがやってくるまでは、私はもうアルベルチヌを愛してはいないと思っていましたし、自分は正確な分析家として何一つ遺漏はないと思っていたし、自分の心の根底まで知りつくしていると思っていた。しかしわれわれの理知は、どんなに明晰でも、心の根底を構成する諸要素を逐一認めるわけにはいかないのである。自分の内心を明察していると思っていたのは私の勘ちがいであった。ところが、精神のもっとも精巧な知覚をもつてしても私にあたえられなかったそのような認識が、たったいま私にもたらされたのであった。それは苦痛の唐突な反応によって、結晶塩のように、固化された、きらきら光る異様な認識であった。」(マルセル・ブルースト『失われた時を求めて』第六編逃げざる女)井上究一郎訳 筑摩書房 6頁)

⑮ 「これからの私の全生涯?それなら私は少しでも考えたことはなかったか、アルベルチヌなしにこれからの全生涯を生きてゆくことを?考えたこともない!それなら私は彼女にささげてきたか、ずっとまえから自分が死ぬまでの私の生涯の全瞬間を?もちろんささげてきた!そのように彼女とは切っても切れない未来なのに、その未来がどういうことになるのかを私は洞察しえなかったのだ、しかもその未来がまさに封印を解かれないまま、私は感じるのだった、ぼっかり穴をあいた私の心の中にその未来が占めていた場所を。」(同書87頁)

⑯ 「それにしても、われわれが盲目同然に支配されていた、そんな苦しい、ぬきさしならぬ二つの真実、われわれの感情の真実とわれわれの運命の真実、そうした真実を、何度われわれはそういうものであることを知らず、また欲せず、口にしたことか、自分はむろんうそのつもりで口にした言葉、ところがその言葉にたいして、事件があと予言的な価値をもたせてしまった。私はあれもこれもこの言葉を思いだした、私たちは二人とも、それらの言葉が含んでいた真実をそのときは知らないで口にしたのだった、そればかりか、芝居をしているつもりでしゃべりさえしたのであり、それらの言葉のうそのは、それらの言葉が私たちに気づかせずにふくんでいた真実にくらべると、とるに足らず、まるで問題に

もならず、私たちのあわれむべき不誠実のなかにせまくとじこめられたものでしかなかった。私たち二人が気づかなかった奥深い現実の手前にあったのが、うそ、あやまりであり、かなたにあったのが、真実、私たちの性格の真実であったのだ。私たちはその真実の根本的な法則を見がしたのであり、その法則が見えるようにするには時が必要なのであった、そのことは私たちの運命の真実についても同様なのである。」(同130頁)

⑰ 同書 114頁

⑱ 同書 130頁

⑲ 「アルベルチヌの死が私の苦しみを解消することができずには、落馬による木との衝突がトゥレーヌで彼女を死なせることだけではなく、私の内心でも彼女を死なせることが必要であったろう。ところがいまほど彼女が私の内心で生きていることはなかった。ある人間の存在がわれわれの内心にはいりこむには、その存在は時の形をとり、時の枠にはまることを強いられてはならなかった。その存在は、継起する瞬間の連続を通してしかわれわれに見えてこないのだから、われわれはそれについては一度につき一つの側面しかとらえることができず、一つの写真しかつくるできなかったのだ。」(同書87頁)

⑳ この点に関して、メルロ＝ポンティがブルーストにおける「独我論」を十分に考慮していないという批判については、Roland Breur, *Singularité et sujet, une lecture phénoménologique de Proust*, Millon, 2000, p.35.しかし、ブリュアはブルーストの小説の中に「二つの間」(entre-deux)の基本構造を見出そうとしているのであるから、メルロ＝ポンティの解釈からそう遠いところにいるわけではない。いずれにせよ、文学作品を哲学的に解釈する時に陥りがちな極端な一般化・普遍化の危険性からメルロ＝ポンティもまぬかれてはいるわけではない。

㉑ メルロ＝ポンティはレヴィ＝ストロースがその数学的に表現された理論によって絶対知と相対主義の両極に陥っていることを指摘し、相互主観的な視点に基づく「諸構造の現象学的読解」(PII6)を説いている。

「弁証法が主観性と客観、社会的なものを包括するのでなくなくてはならない。レヴィ＝ストロースによってたびたび断言される体験の不可解性、

あるいは結局のところ体験は絶対的に交換不可能なものである。しかしこのことは決して現象学的社会学(sociologie phénoménologique)を導かないのである。体験の言語を語るたびに、レヴィ＝ストロースはそれが比喩であると付け加えている。実在は、物理的法則と同種のものであることになる。」(PI20)

㉒ ジョン・オニール『メルロ＝ポンティと人間科学』奥田和彦編 宮武昭・久保秀幹訳 新曜社 一九八六年、129頁以下参照

㉓ 最終ページに付された日付からして『弁証法の冒険』のヴェーバーに関する部分は一九五三年七月に執筆されたと推測される。

㉔ たとえばヴェーバーは『社会科学と社会政策に関わる認識の「客観性」』で次のように述べている。

「カントに溯る現代認識理論の根本思想、すなわち概念はむしろ経験的に与えられたものを精神的に支配するための思考の道具であり、またそのみでしかありえない、ということを経験まで考えた人にとっては、理念型が必然的に鋭い発生的概念(genetische Begriffe)であるという事情は、そうした理念型を形成すること(Bildung)に反対意見を述べることを許さないものだろう。」(Max Weber, *op.cit.*, p.59.)

しかし、この発言は、またすぐに次のように補足される。

「彼は、ただ理念型の適用(Verwendung)にあたっては、理念的な思考形成物としてのその性格を注意深く堅持し、理念型と歴史を取り違えないことを願うのみであらう。」(Ibid.)

㉕ ヴェーバーは宗教学の試みの中では、性愛の感情と現世的禁欲主義との緊張関係を考察している。

「愛する者は、自分がいかなる合理的な努力によっても永遠に到達しない真実の生命の核心に足を踏みおろしたと感じ、また日常性の鈍感さからも、合理的な秩序の骸骨のように冷たい手からも完全に逃れでたと感じるが、それはまさしく、自分の、いかなる手段によっても伝達しえないようなこの点においては神秘的な神の『所有』と相似した一体験のもつ論証不可能で内容無尽蔵な性質においてそう感じるものであり、またその体験の強度によるだけでなく、またみずから直接にとらえた事実性によってそう感じるのだといってよいであらう。」(マックス・ヴェーバー『宗教学

学論選」大塚久雄・生松敬三訳みすず書房一九七二年141—142頁

②6 メルロ＝ポンティは、すでに一九五一年に発表された「哲学者と社会学」の中で次のように語っていた。

「制度的な総体 (Tensemble institutionnel) の中にすでに書き込まれているものもろの (役割) の間で個人のドラマが起こった、ということ、したがって、子供はその人生の初めから、自分に与えられる愛情や自分を取り巻いている諸々の道具の単純な知覚によって、さまざまな意味の解説を行なうもで、この解説によって彼はまずもって彼自身のドラマを彼の文化のドラマへと一般化するということと、しかしながら、どんな象徴的意識も、子供が生きたり生きなかつたり、苦しんだり苦しまなかつたり、感じたり感じなかつたりしていることを最後には仕上げていくものだということ——したがって彼の最も個人的な歴史の細部には、彼のものであるこの意味に何もたらさないようなものはないのであり、この意味を彼が表明することになるのは、最初はそうするのがよいことだと信じていたことにしたがって考えたり生きたり、また自分の文化の想像的世界にしたがって知覚した後で、ついにはその関係を逆転し、彼の言葉と彼の行為の諸々の意味の中に滑り込み、彼の経験における最も秘密のものに至るまで文化へと転換するに至ったときのことである、ということと同時に理解しなくてはならないのである。」(Maurice Merleau-Ponty, *Signes*, Gallimard, 1960, p.140.)

②7 マックス・ヴェーバーは次のように述べている。

「生 (das Leben) は、その非合理的な現実性と可能的な諸々の意味でのその内容において、汲み尽くされることはないし、価値連関の具体的な形態化 (die konkrete Gestaltung) はしたがって流動的な (fließend) ままにとどまり、人間文化の暗い未来 (die dunkle Zukunft) への変遷に投げ入れられるのである。かの最高の価値理念が授けられる光は、時を貫いて流転していく膨大な出来事の混沌とした流れ (chaotischer Strom) の、たえず変転していく限りある部分にとどまらず降り注ぐのである。」(Ibid., p.63.)

②8 メルロ＝ポンティはここでもゲシュタルト知覚をモデルとして「社会的なもの」の把握を考えている。

「社会的なもの社会学を、社会的な知覚 (Perception sociale) の理念化としてとらえねばならないし、一つの社会、一つの婚姻体系を象徴的体系、あるいは社会的事象としてとらえねばならない。つまり一つの本質ではなく知覚のスタイルに即した秩序の原理としてとらえねばならない。」(P.118)

形相変更と理念化を相互主観性と受動的総合の構造と結びつけるなら、公共的なもの、社会的な発生の構造は、単純に数学的な解析のモデルによってではなく、知覚の形態化発生のモデルによってとらえられるべきだということなのであろう。『見えるものと見えないもの』研究ノートでは、「形態化」(Gestaltung) としてその事態は次のように語られている。

「レヴィ＝ストロースの (機会) の共同化、出会いによる形態化 (Gestaltung) の説明についての私の批判をここで再び行なうこと。そう、出会いはなくてはならない、しかしこの出会いによって精練されるもの、西洋の象徴的母胎は因果性の産物ではない。「ゲシュタルトが多型性から生じるということ、このことはわれわれを主観と客観の哲学のまったく外に置くということを示すこと。」(Maurice Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible*, Gallimard, 1964, p.260.)

②9 メルロ＝ポンティの「制度化」の概念は、生命、感情、言語、知、作品、歴史へとすべての領域に見られる受動的発生の構造であると見てよい。だがその場合、有機体論のような自然主義的一元論ではないにせよ、一種の存在論的一元論が導入されてしまう危険性がないとは言えない。

引用文献略号

Maurice Merleau-Ponty:

IP : *L'institution, La passivité, Notes de cours au Collège de France* (1954-1955), Belin, 2003.

RC: *Résumés de cours Collège de France 1952-1960*, Gallimard, 1968

AD: *Les aventures de la dialectique*, Gallimard, 1955.

(本学文学部助教授)